

## 特集：教育DXの現状と課題

# 教育DX時代における適応問題とアセスメントについての検討 — 適合の良さモデルに基づいたツール開発の必要性 —

鈴木 洋 介 (横浜国立大学教育学部)

会 沢 信 彦 (文教大学教育学部)

Discussion on Adaptation Issues and Assessment thereof in the Era of Educational DX  
— Needs for Tool Development based on the “Goodness of Fit” Model —

SUZUKI YOSUKE, AIZAWA NOBUHIKO

(Faculty of Education, Yokohama National University)

(Faculty of Education, Bunkyo University)

### 要 旨

本研究では、適応問題に関する知見を整理し、教育DX時代における適応問題とアセスメントについての展望を示すことを目的とした。検討の結果、「子どもの特性—教師の要請の適合性（マッチング）」に関する情報を多角的に収集し、統合的に対処方略を検討することの必要性、それらの情報を可視化するシステム開発の必要性があることが示唆された。

## 1. 研究課題と研究目的

### (1) 生徒指導上の課題と予防的教育

学校教育におけるいじめの認知件数、暴力行為発生件数、不登校児童生徒数等がいずれも過去最多を記録するなど（文部科学省, 2024）、子どもの適応をめぐる問題が山積している。こうした課題の背景として、子どもの適応に関する要因が複雑化・多様化・困難化していることが指摘されている（中央教育審議会, 2015）。そのため、適切な対応や再発防止を行うためには、児童生徒の表面化した行動だけを捉えるのではなく、複雑な家庭環境やインターネット環境などの環境要因の課題や子どもの心の課題を捉える必要がある。とりわけ、生徒指導の領域では子どもの「心」のサインを見逃さず、問題行動の前兆を把握すること、子どもの不安、悩み、ストレスなどの心の状態把握が重要であるとされている（国立教育政策研究所, 2011）。

かつて学校教育現場における生徒指導では、

課題が起きてから対応する事後対応の生徒指導が主であった。しかし、学校心理学や教育相談領域では早くから子どもの社会的スキルを育成することで、生徒指導上の諸課題に対して未然防止を図ろうとする研究や実践が数多くなされてきた。具体的には、自己理解・他者理解、人間関係形成能力、アサーション、アンガーマネジメントなどに関する研究や実践があげられる。近年では、子どもの社会性や情動の発達を支援する教育プログラムによって生徒指導の諸課題を未然に抑止し、社会的自己実現を図ろうとする「社会性と情動の学習（Social and Emotional Learning, 以下SEL）」が目ざされている。小泉（2011）は、アメリカにおけるSELに関する実践や研究知見を基盤として、日本の学校教育に適合的・実践的なプログラムを数多く実践し、その効果を実証的かつ系統的に示している。

## (2) 教育DX時代の到来と心理アセスメントの現状

生徒指導の諸課題に対する予防的教育プログラムを実施さえすれば、全ての学級に一律に効果が現れるというものではない。教師は目の前の子ども達の情緒的課題・状態を適切にアセスメントし、それに応じた支援策や予防プログラムを講じる必要がある。こうした教育実践上の課題を踏まえ、学校教育現場では早くから子ども達の心理状態を把握するアセスメントツールが活用されてきた。これらのツールは、子どもたちに友達との関わり方や休み時間の過ごし方、所属クラスの居心地の良さなどについて尋ねて回答を求める。その結果は、レーダーチャートやプロット図で表され、子ども個々の心理状態や学級の状態像が可視化される。具体的には、河村（1999）の学級満足度尺度（Questionnaire-Utilities; 以下, QU）、伊藤・松井（2001）の学級風土質問紙（Classroom Climate Inventory; 以下, CCI）、栗原・井上（2010）のアセスなどがあり、その利便性や情報量の豊富さ等を理由に支持を集め、教育現場に広く普及している。しかし、ツールが開発された当初は、子どもが回答後、一度データ分析を請け負う担当部署に送付する必要があるため、結果がフィードバックされるまでに数週間から一か月程度のタイムラグが生じてしまうという課題があった。近年では、この課題を解決するためにweb QUやweb版アセスが開発され、その利便性が大幅に向上した。児童生徒がタブレット端末等を使って質問項目に回答することによって、回答直後に結果が集約・分析されるようになったのである。これにより、教師は児童生徒の客観的データをもとにして、即座に学級経営や支援の方略を練ることが可能となった。

子ども達の情緒的状态や課題をタイムリーかつ継続的に把握しようとする動きは年々加速している。高橋・山本（2021）は児童生徒

の心の状態をリアルタイムで把握する心の天気というデータ可視化システムを導入した。このシステムでは、児童生徒にその日の心のあり様を「晴れ」・「くもり」・「雨」のいずれかで入力することを求め、入力された結果と学習情報、出欠情報、保健室の利用状況などの情報とリンクさせて生徒指導に活用した実践研究を報告している。また、久我・武田（2020）や八並（2023）は、NECネットエスアイ株式会社によるスマート感情ケア・ソリューションFEELBOTアプリを小学校に導入して、同アプリを活用した実践の紹介と教育効果について検討している。久我・武田（2020）は、得られた情報を教職員で共有することにより、気になる児童に声かけや面談を実施して不登校の未然防止に活用したことを報告している。また、八並（2023）は、児童の情動状態に関する情報は①アセスメント情報の一部として活用可能であること、②同僚と情報を共有しミーティングに活用できること、③情緒的データの蓄積は個別支援計画の作成時に有益な情報源となり得ること等を指摘している。

以上のことから、教育DX時代の到来により児童生徒の適応状態に関連する諸情報を複合的につなぎ合わせて対策を検討することが容易にできるようになってきたといえる。しかしながら、以上の情報をつなぎ合わせることは、はたして児童生徒の適応の問題の解決や未然防止に効果的であるのか、科学的な効果検証はまだほとんど行われていない。すなわち、どのような情報を収集しどのように分析すれば、適応問題をよりよい方向に導けるのかという具体的な検討が十分に行われていない状況である。そこで本研究では、児童生徒の適応状態を予測し向上させるために、いかなる情報を収集して統合的に解釈すべきなのか理論的に検討する。具体的には、これまでの子どもの適応を主題とした文献を用いて研究動向を把握するとともに、適応を規定す

る要因について検討する。さらに、その検討結果を踏まえて教育DX時代にふさわしい適応支援の方略について検討することを目的とする。

## 2. 「適応状態」の測定

適応をめぐる問題を検討する際、当事者の適応状態をいかに測定するのかという課題がある。これについて、これまでの適応をめぐる研究では、大別して客観的指標と主観的指標、二つの指標による測定が行われてきた。本項では、この二つの指標について検討する。

### (1) 客観的指標による適応状態の測定

学校適応は、伝統的に子どもの学業面に基づいて定義され、子どもの適応状態を測定する際は学業達成の指標等を含めた客観的指標が用いられてきた(例えば, Berndt & Keefe, 1996; Ladd & Burgess, 2001; Wentzel, 2002・2003a)。児童生徒にとって、学校生活の大半は授業時間であるため、学業成績により適応状態が大きな影響を受けることは想像に難くない。これらの研究では、学習支援をすることこそ児童生徒の適応状態を向上させるという前提を共有しているといえる。

一方で、適応に影響を与えるもう一つの要因として、他者との関係性が注目されてきた。例えば、Moreno (1953) は「集団の心理的な特徴を数学的に研究すること」(= Sociometry) を目指し、集団成員間における「好き—嫌い」という感情の流れを想定して成員間の感情的交流状態を抽出するためのテスト (sociometric test; ソシオメトリックテスト) を開発した。このテストにより、集団の成員はメンバーからどのように評価されているのか (= ソシオメトリック地位) を可視化することが可能となった。また、Wentzel (2003b) は、生徒が学校で適応的であるためには、自分自身や教師・他生徒が重視している目標を達成する必要があるが、目標は周囲から認められるようなやり方で達

成されなければならないとしている。

以上の研究では、当該児童生徒が学級内の他者から承認されている状態こそが適応状態を意味していると解釈されている。

### (2) 主観的指標による適応状態の測定

一方で、これら客観的な指標で適応状態を判断することに対して批判的な立場がある。なぜならば、客観的指標で適応的と判断される場合において、必ずしも本人は適応的だと感じていない可能性が残されているためである。

その一例として、過剰適応の概念があげられる。過剰適応とは、外的適応が過剰なために内的適応が困難に陥っている状態(桑山, 2003)、環境からの要求に従おうとするあまり、内的な欲求を抑圧してしまうこと(石津, 2006)と定義される。つまり、環境からの要請への対処を優先し、表面的には適応的な行動をとっているものの、内的な意識のレベルでは不満を抱えているという状態である。自己と他者の協調関係を重視する生徒は周りに合わせて生活しているために一見適応しているように見えるが、主張をあまりしない場合にはストレスをためている可能性がある(奥野・小林, 2007)。

反対に、客観的指標により適応状態がよくないと判断される場合でも、本人にとっては深刻な問題が生じていないこともある。例えば、反社会的行動に関する興味深い指摘がある。加藤・大久保(2005・2006)は、反社会的行動は教師から見れば不適応行動と判断されたとしても、生徒から見れば適応的行動である可能性があるとしている。その根拠として、いわゆる「荒れている」学校の生徒は、反社会的行動を肯定的に評価していることがあげられている(大久保・加藤, 2002)。反社会行動は教師や学校から排斥されるが、生徒同士の関係性の中では受容される文化が存在するということを表していると説明されている(Emler, & Reicher, 1995; 加藤, 2001)。

以上のことから、学力や他者からの評定といった客観的指標による適応状態の測定には限界があり、主観的な適応状態にも目を向ける必要があるといえる。北村（1965）が指摘するように、心的主体である人間において、外的環境と内的環境を区別することが重要だといえる。

### 3. 「適応」に影響を与える諸要因の分類

次に、子どもの適応に影響を与える要因について検討する。これまでの適応研究では主に、環境要因と個人要因の二つの観点から検討されてきた。

#### （1）適応に影響を与える環境要因の研究

第一の視点は、環境変数が個人の適応にいかに影響を与えるのかという視点である。例えば、友人関係、教師も含めた学級を環境変数として捉え、その状態を測定しようとする研究がある。その代表的なものとしてTrickett & Moos（1995）によるClassroom Environment Scale（以下CES）とFraser, Anderson & Walberg（1982）によるLearning Environment Inventory（以下LEI）の2つがある。CESは、「関係性」「個人発達と目標志向」「組織の維持と変化」からなる9下位尺度90項目からなり、生徒の生活意欲全般に学級環境が及ぼす効果に注目している。これに対してLEIは、学校教育の主目的とされる知識伝達の効率化に寄与する学習環境評価を重視したもの（伊藤・松井, 1996）とされている。学級の心理社会的・個別的性質を意味する学級風土は、子どもの学業や心理社会・行動面の発達など多様な側面に影響を与えるとされる。たとえば、学業面では、児童生徒の学業達成や動機づけ、学業的自己概念（Shim, Kiefer, & Wang, 2013）に学級風土の影響があるとされてきた。また、社会行動面では、レジリエンスの獲得（Doll, Brehm, & Zucker, 2014）や、攻撃性（Thomas, Bierman, & Powers, 2011）等に影響があることが示さ

れている。

国内の研究では、伊藤（1999）が日本の実情にあった学級風土質問紙の作成をするために学級観察や教師面接を繰り返し実施し、学級に関する項目群と教師に関する項目群を帰納的に作成した。その後、理論面と実践面から質問紙の再構成を行い（伊藤・松井, 2001）、さらに小学生用短縮版学級風土質問紙（伊藤, 2009a）や中学生版学級風土尺度（伊藤・宇佐美, 2017）も作成している。こうして作成された学級風土尺度は、子どもの視点から捉えた学級の状態像を多面的に描くことができるため、これを用いて教師にコンサルテーションを行うなどの実践的な介入研究が行われている。

#### （2）適応に影響を与える個人要因の研究

適応の問題は、個人変数にその要因の多くを帰することができる。これまで適応と個人変数の関連を検討した研究として、暴力欲求と規範意識（小嶋・松田, 1999）、性格特性（宮下・細川, 1993）といった個人変数と適応の関連が検討されてきた。また、不安障害傾向と学校不適応感（石川・大田・坂野, 2003）、攻撃性と不適応行動（濱口, 2002）といった個人変数と不適応感・不適応行動の関連を検討する研究も見られる。これらの研究では、個人の欲求や性格、情緒的特性といった比較的安定している内的要因と適応の関連について検討されているといえる。

一方で、後天的で可変的な個人的要因と適応の関連も検討されてきた。その代表的なものが、ソーシャル・スキルと適応の関連についての研究である（例えば、Jones, Hobbs, & Hockenbury, 1982；粕谷・河村, 2004）。ソーシャル・スキルは「対人場面において適切かつ効果的に反応するために用いられる言語的・非言語的な対人行動と、そのような対人行動の発現を可能にする認知過程の両方を含む概念」と定義される（相川, 1996）。ソーシャル・スキルに関連する研究を概観すると、

人々が抱える困難をコミュニケーション技術の側面から捉え、その技術を向上させることによってそれらの困難さを解決しようとするアプローチ方法が検討されているといえる。

また、行動を規定する認知や情報処理過程と適応の関連を検証する研究もある。例えば、Crick & Dodge (1994) は、社会的適応に関する社会的情報処理モデルを提唱し、実証研究を行っている。このモデルでは、社会的情報処理が社会的適応をもたらすだけでなく、社会的適応が社会的情報処理の在り方に影響を与えたとしており、情報処理過程と社会的適応の循環的關係を示唆している。

以上のような個人変数と適応の関連を検討した研究では、環境に適応できるか否かは、個人の内面にその原因を求めるという点において共通している。性格や不安傾向など一定の特性要因だけではなく、行動特性やスキルなど後天的なトレーニングによって習得可能な要因から適応の在り方を探索するなど多様な研究が展開されつつある。

#### 4. アセスメントツールの活用と課題

現在、わが国の適応をめぐる研究においては、主観的指標によって適応状態を測定することが主流となっていることや、環境要因と個人要因の2つの要因が子どもの適応に影響力をもっていることが明らかとなった。これらのことを踏まえ、現在わが国で広く普及しているCCIとQUを取り上げ、その特徴と課題を整理する。

また、アセスメントツールは、児童生徒の適応状態の抽出や、結果の提示そのものに臨床的な意味があるわけではないことが指摘されている(安藤・田嶋, 2012)。このことから、アセスメント実施後にいかなる方法で教師にフィードバックするのか、結果をどのように活用するのか、という点についても検討する。

#### (1) 子どもの視点を通して描かれる学級環境

##### ①学級風土尺度(CCI)の活用

学級風土尺度(CCI)は、57項目の質問項目に5段階評定で回答することによって、その回答の平均値から学級の性格を多面的に描くものである。CCIは、8つの下位尺度があり、学級内の生徒間および教師—生徒間の対人関係、男女やグループなど多層な切り口から学級のダイナミズムを描くことができる。また、項目プロフィールから、教師の働きかけや個性を推測することができる。

このCCIを活用した介入研究も行なわれてきた。介入研究ではCCIを実施後、調査者が教師と面接を継続的に行うことによって、CCIの結果という客観性と教師の主観性を行き来しながら他者と学級の状態像を共有することが可能となる。伊藤(2003)は、CCIを用いた介入研究の中で、アセスメント結果や対話の中から教師の日々の実践を読み取り、浮かび上がらせることができることを実証的に示している。

##### ②QUの活用と課題

QUは「承認」と「被侵害」の程度を尋ねる2下位尺度各10項目から構成される。児童生徒の回答結果に基づき、Y軸に「承認得点」を、X軸に「被侵害得点」をとり、標準値(全国平均値)で直交させて構成される4群に分けて結果をプロットする。QUは個人の回答状況をプロット図に集約することによって学級全体の状態像が示され、結果を直観的に理解しやすいことが特徴である。

QUの実施後は、児童生徒の回答結果を教育実践に活かしていくため、教職員研修の事例検討方法としてK-13法が示されている。K-13法は、実施方法や留意点などが構造化・体系化されており、実施しやすいものとなっている。佐々木・荻間澤(2009)は、スクールカウンセラーとして学級集団が崩れかけている学級へのQUの実施と学級コンサル

テーションを実施し、具体的対応策や同僚からの心理的サポートを受け、学級担任の意欲が喚起され、学級担任と学級集団が立ち直っていったことを報告している。一方で、QUの結果を教師に伝える際の留意点として、結果のフィードバックやコンサルテーションの方法によっては、教師の抵抗感を生じさせたり（伊藤, 2009b）、教師自身の評価につながったりするリスクがあることが指摘されている（緒方, 2004）。

## （2）アセスメントツール活用の成果と課題

従来は学級の状態像や子どもの適応状態を知るためには教師の直感や経験知に頼る以外の方法はなかった。しかし、前述したアセスメントツールが開発されたことによって、客観的な指標で学級像や子どもの適応状態を捉える重要性とその具体的方法が示されたといえる。また、学級像や適応状態に関する情報を他の教員と共有しながらコンサルテーションを行うことが可能となった。

一方で、アセスメントツールの活用法については3つの課題があると考えられる。第一に、実施が容易であり広く活用されるようになったがゆえに、「マニュアル通り、書いてある通りにやってみたがうまくいかなかった」「質問紙を勧められてやったが効果がなかった」という教師の声があがるなど（大久保, 2011）、学級アセスメントツールを利用すること自体が目的となってしまう、改善案が十分に練られない状況が少なからず散見されることである。第二に、コンサルテーションの方法として、理論的知識や対応方法の教授が多いことである。この課題を踏まえ、教師の主体性やリソースを活かした対応策を検討する必要性が指摘されている（小林, 2009）。第三に、CCIやQUで抽出された結果を教師がどのように受け止めるかといった結果の解釈に関する課題がある。子どもの適応状態は主に環境要因と個人要因の2つの要因で検討されてきたことを前述したが、第三の視点とし

て「個人—環境の適合性（マッチング）」から捉える視点がある。これまでのアセスメントツールを活用した実践研究においては、この適合性（マッチング）理論と呼ばれる視点が欠如している、あるいは軽視されていることが最大の課題であると考えられる。そこで、この第三の課題については次項で詳細に検討する。

## 5. 適応研究における「個人—環境の適合性」の視点

CCIでは児童生徒に所属する学級について直接問い、QUでは個人の承認得点と被侵害得点を集約することによって、それぞれ児童生徒から見た学級像を描き出すことが可能となった。しかし、児童生徒による主観的指標のみで、アセスメントが完了してしまうことには課題が残されている。本項では、「個人—環境の適合性」に関する論考から、今後の適応研究の進むべき方向性について検討したい。

### （1）「個人—環境の適合性」の視点とは

適応とは本来、「個人と環境の相互作用（八木・篠原, 1989）」や「個人と環境の関係（近藤, 1994；佐々木, 1992）」を表す概念である。つまり、個人に関する要因と環境に関する要因のどちらか片方だけを重視した研究は、適応概念の本来の定義に示される「適応は、個人と環境の関係性の中に生じるものである」という視点が抜け落ちてしまう可能性があるといえる。この個人と環境の間に生じる関係性は、「個人と環境の適合（person-environment fit）」（French, Rogers, & Cobb, 1974; Kulka, Klingle, & Mann, 1980）、「個人と文脈の適合の良さ（person-context goodness of fit）」（Lerner, 1983；Lerner, Baker, & Lerner, 1985）という言葉で表現されてきた。これらは用いている言葉こそ異なるが、ほぼ同義であり、個人と環境の適合性としてまとめられる（大久保, 2010）。

適合性理論に基づいた実証的研究として、ストレス研究がある。「心理的ストレスとは人間と環境との間の特定の関係である」とされ (Lazarus & Folkman, 1984)、適応を「ある状況における対処行動の選択の適切さ」だと指摘している (Vitaliano, DeWolfe, Maiuro, Russo, & Katon, 1990)。近藤 (1994) も同様の立場から、「子どもの情緒的問題を、子ども個人の欠陥に由来すると考えるのではなく、子どもがもつ行動様式と、子どもが所属する社会体系 (system) が要求し期待する行動様式との間の“不適合” (mismatch) のあらわれ」として解釈することが必要だとしている。

この視点に基いた国内の実証的検討としては、年度初めの教師の要請に対する生徒の要請対処の高低が年度末の生徒の適応状態を規定するとしている岡田 (2012) の研究や、教師が認知する自身の学級経営のスタイルと学級集団の特性が適合している場合は児童の適応が高くなるという大久保ら (2021) の研究がある。これらの実証的研究は、個人と環境の適合性が児童生徒の学級適応を規定する重要な要因であることを示しており、個人—環境の適合の良さ仮説を支持するものである。

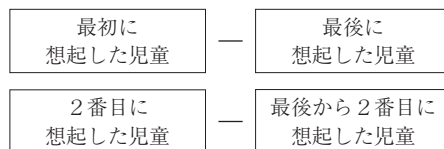
こうした知見の蓄積を踏まえると、適応問題に対する方略を検討する際に関係論的アプローチが必要性であると考えられる。近藤 (1994) は児童生徒の不適応は、どのような個人がどのような環境 (教師や学級集団等) と出会った時に児童生徒が適応的 (あるいは不適応的) になるかを検討し、個人と環境の関係の改善を図る必要があるとしている。このことから、アセスメントツールで抽出された児童生徒の適応状態のみを取り上げて児童生徒側の対処行動を検討するのでは不十分だといえる。児童生徒の適応状態が望ましい状態ではなかった際に、人的環境としての教師自身がいかに変容することができるのか、友人関係も含めた環境要因をどのように変容さ

せるのかといった環境への介入方略について検討することも必要であるといえる。

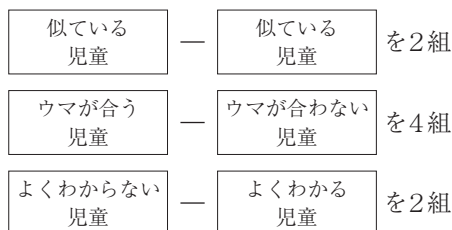
## (2) 教師の要請を抽出するツール Role Construct Repertory Test の活用

教師と子どもの適合性 (マッチング) を直観的に可視化する方法が開発されている。それは、近藤 (1995) によって開発された教師用RCRTである。このテストでは、以下の①～⑥の手続を行うことによって、教師が児童生徒をどのように認知し、どのような行動を要請しているのかといった潜在的な認知次元を抽出できるとされている。

- ① 学級の児童を自由に思い浮かべ、最初に思い浮かんだ4名と最後に思い浮かんだ4名で4組の組み合わせを作る。



- ② 教師から見て、児童相互に「似ている」と思う児童の組み合わせを2組、教師にとって「ウマが合う子 (好感がもてる子)」と「ウマが合わない子 (好感がもてない子)」で4組の組み合わせを作る。さらに、教師にとって「何を考えているのかつかめない」と感じる子2名、反対に「どんな気持ちでいるのかよくわかる」と感じる子2名で、2組の組み合わせを作る。



- ③ ①～②の作業で得られた12組の児童の組み合わせで、一方の児童には見られるが、

他方の児童には見られない重要な特徴をあげてもらおう（似ている児童のペアは2人の類似点）。次に、教師にとってその特徴とは反対の意味の言葉をあげてもらおう。この対概念をコンストラクトと呼ぶ。

(例) A君 — B君 ペアでA君を「粘り強い」と見ている。次に「粘り強い」と反対の意味をもつ言葉を尋ねたところ、「諦めやすい」と回答。  
→ 粘り強い — 諦めやすい というコンストラクト

- ④ 得られた12のコンストラクトを用いて学級内の児童全員について5段階で相対評価を行う。

(例) 粘り強い というコンストラクトの評価  
→ 「よくあてはまる」児童に「5」  
→ 「全くあてはまらない」児童に「1」

- ⑤ 教師にとっての「理想的子ども像」、教師がこうありたいと思う「理想の自己」、教師自身の現実の姿「現実の自己」を④と同様に評定する。

- ⑥ ④～⑤の作業で得られたデータをもとに、因子分析を行い、12の枠組みの中から教師の各コンストラクトの背景因子を抽出し、これを教師の児童認知枠として解釈する。

教師用RCRTが開発されたことにより、教師の児童生徒を理解する認知次元を抽出し、教師と児童生徒の適合性を可視化できるようになった。例えば、教師用RCRTを実施後、図1のような子ども認知図が作成される（鈴木・庄司, 2024）。図1の「子ども認知図」は、教師が「自己コントロールができるか（横軸）」と「意欲・表現力があるか（縦軸）」と

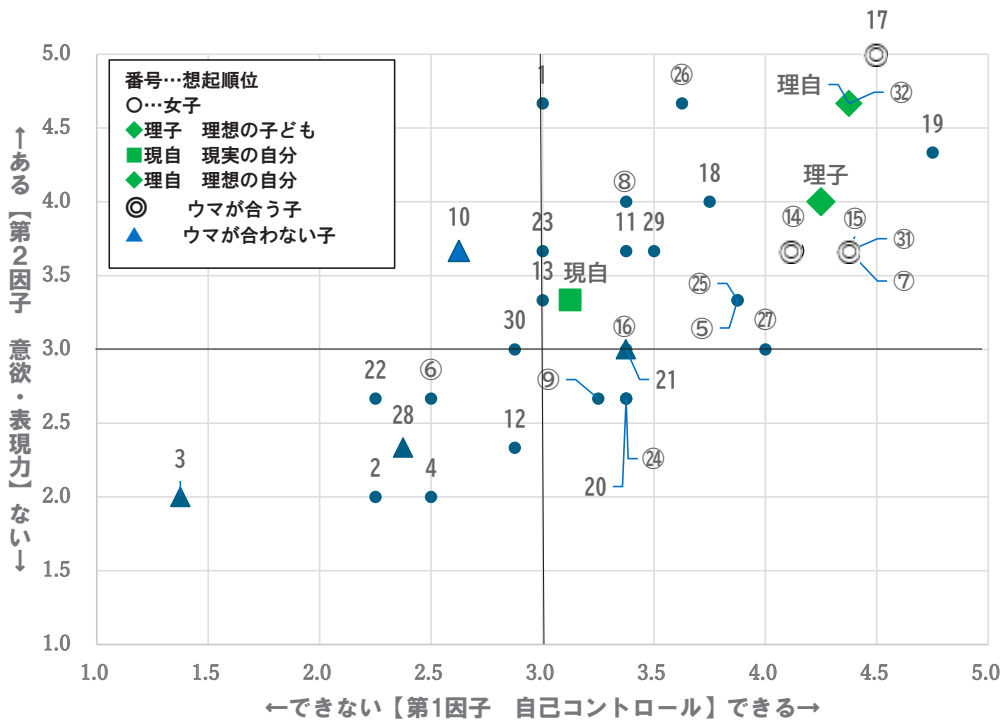


図1 教師用 RCRT の抽出結果により作成された子ども認知図（鈴木・庄司, 2024）

いう2つの軸で子どもを理解・評価していることを表している。この図の右上の方に配置されている子ども（評定得点が高い子ども）は、教師の指導観にマッチしている子ども、反対に図の左下に配置されている子どもは教師の指導観にマッチしていない子どもだと解釈される。このように教師と児童生徒の適合性を可視化し、その関係性および適合性を変容させることを目的とした介入研究も行なわれている。たとえば、伊藤・三島（2005）、三島（2006）は、スクールカウンセラー（以下、SC）が学級担任に教師用RCRTを用いたアセスメントとコンサルテーションを実施し、教師の児童認知と学級雰囲気の望ましい変容を報告した。鈴木・庄司（2024）は、教師用RCRTで抽出された教師の児童認知次元を教師にフィードバックし、日常の教育実践と関連付けながら省察を行うように求めるモニタリング面接を継続的に実施した。3か月に及ぶ介入の結果、教師の児童認知および要請行動が変容し、それに伴って児童の学級適応感が有意に上昇したことを報告している。これらの結果から、教師が子どもとの適合性を客観的な視点から捉え直すことが「児童生徒—教師間の適合性」を変容させる契機となり得ること、また、それに伴って児童生徒の適応が促される可能性が示唆されたといえる。

しかし、教師用RCRTを用いた実証的研究においては、主に教育実践上の課題が二点残されている。第一の課題は、調査・分析手続の煩雑さがあげられる。教師用RCRTの手続では上記①～⑥の過程で約1時間の時間を要する。第二の課題は、得られたデータの分析過程で、因子分析の過程を要することである。これらのことから、現在のところ教師用RCRTは、web QUやweb版アセスのように教育現場で気軽に実施できるツールになり得ることができていないと考えられる。

### （3）まとめ 教育DX時代における適応問題の展望

これまでの検討を踏まえ、教育DX時代において、学校教育現場が抱える適応の問題にどのように対峙していけばよいのか検討し、今後の展望を示す。

これまで適応研究では、児童生徒の適応状態を抽出した後に、その結果に応じてマニュアル化された対応策を講じても、期待したような効果が得られないことがあるという指摘がある（大久保, 2011）。これは、適合性理論の項で概説したように、子ども達の適応状態と教師から発せられる要請の適合性（マッチング）という観点が抜け落ちているために、期待した変化を起こすことができていないと考えられる。この課題を乗り越えるためには、現在開発されているweb QUやweb版アセス等により抽出された子どもの適応に関するデータと、教師側の認知・要請に関するデータを対応させ、その適合性について分析するシステムの開発が求められる。教師がどのような視点で子ども達を認知・評価しているかという点については、無意識的・暗黙知的であるとされるが（佐藤ら, 1991；千々布, 2005）、教師用RCRTの理論と手法に基けば、その潜在意識を抽出することが可能になると考える。このシステム開発が実現されれば、CCIやQU等の子ども側の主観的なデータと合わせて解釈することによって「子ども—教師間の適合性」の変容可能性を高めることができるかと推測される。また、たとえ年度当初に「子どもの特性—教師の要請」にミスマッチが生じていたとしても、そのミスマッチを細分化・具体化して捉え直すことが可能となるため、マッチング改善の可能性を高めることができると考えられる。

## 引用文献

- 相川 充 (1996). 社会的スキルという概念  
相川充・島村俊充 (編) 社会的スキルと  
対人関係－自己表現を援助する 誠信書  
房 pp.3-21.
- 安藤徹・田嶋誠一 (2012). 教師支援を目的  
とした学級アセスメントの活用現状と  
展望 九州大学心理学研究, 13, 101-108.
- Berndt, T. J., & Keefe, K. (1996). Friends'  
influence on school adjustment: A  
motivational analysis. In J. Juvonen &  
K. R. Wentzel (Eds.) *Social motivation:  
Understanding children's school  
adjustment (Cambridge studies in  
social and emotional development)*.  
Cambridge University Press. pp.248-278.
- 千々布敏弥 (2005). 教師の暗黙知の獲得戦  
略に関する考察－米国における優秀教員  
認定制度に注目して 国立教育政策研究  
所紀要, 134, 111-126.
- 中央教育審議会 (2015). これからの学校教  
育を担う教員の資質能力の向上につ  
いて－学び合い、高め合う 教員育成コ  
ミュニティの構築に向けて－ (答申)  
(中教審第 184号)
- Crick, N. A., & Dodge, K. A. (1994). A  
review and reformulation of social  
information-processing mechanisms in  
children's social adjustment.  
*Psychological Bulletin*, 115, 74-101.
- Doll, B., Brehm, K., & Zucker, S. (2014).  
*Resilient classrooms: Creating healthy  
environments for learning* (2nd ed.).  
New York: Guilford Press.
- Emler, N. & Reicher, S. (1995).  
*Adolescence and delinquency: The  
collective management of reputation*.  
Blackwell.
- Fraser, B. J., Anderson, G. J., & Walberg  
(1982). Assessment of learning  
environments : Manual for learning  
environment inventory (LEI) and my  
class inventory (MCI). Perth; Western  
Australian Institute of Technology.
- French, J. R. P., Jr., Rodgers, W., & Cobb,  
S. (1974). Adjustment as person-  
environment fit, In G. V. Coelho, D. A.  
Hamberg, & J. E. Adams., (Eds.)  
*Coping and adaptation*. New York:  
Basic Books. pp. 316-333.
- 濱口佳和 (2002). 学校における問題・不適  
応行動と攻撃性 山崎勝之・島井哲志  
(編) 攻撃性の行動科学：発達・教育編  
ナカニシヤ出版, pp.135-151.
- 石川信一・大田亮介・坂野雄二 (2003). 児  
童の不安障害傾向と主観的学校不適応の  
関連 カウンセリング研究, 36, 264-  
271.
- 石津憲一郎 (2006). 過剰適応尺度作成の試  
み 日本カウンセリング学会第39回大会  
発表論文集, 137.
- 伊藤亜矢子 (1999). 学級風土質問紙作成の  
試み～学級風土を捉える尺度の帰納的な  
抽出～ コミュニティ心理学研究, 2,  
104-118.
- 伊藤亜矢子 (2003). スクールカウンセリング  
における学級風土アセスメントの利用  
心理臨床学研究, 21 (2), 179-190.
- 伊藤亜矢子 (2009a). 小学生用短縮版学級風  
土質問紙の作成と活用 コミュニティ心  
理学, 12, 155-169.
- 伊藤亜矢子 (2009b). 学校・学級組織への  
コンサルテーション 教育心理学年報,  
48, 192-202.
- 伊藤亜矢子・松井 仁 (1996). 学級風土研  
究の経緯と方法, 北海道大學教育學部紀  
要, 72, 47-71.
- 伊藤亜矢子・松井 仁 (2001). 学級風土質  
問紙の作成 教育心理学研究, 49 (4),  
449-457.

- 伊藤亜矢子・宇佐美慧 (2017). 新版中学生用学級風土尺度 (Classroom Climate Inventory; CCI) の作成 教育心理学研究, 65, 91-105.
- 伊藤崇達・三島美砂 (2005). 教師の学級経営を支援する—「教師用RCRT」を用いて— 日本教育工学会論文誌, 29, 93-96.
- Jones, W.H. Hobbs, S. A. & Hockenbury, D. (1982). Loneliness and social skill deficits. *Journal of Personality and Social Psychology*, 42, 682-689.
- 粕谷貴志・河村茂雄 (2004). 中学生の学校不適応とソーシャル・スキルおよび自尊心との関連—不登校群と一般群との比較 カウンセリング研究, 37, 107-114.
- 加藤弘通 (2001). 問題行動の継続過程についての分析 発達心理学研究, 12, 135-147.
- 加藤弘通・大久保智生 (2005). 学校の荒れと生徒文化の関係についての研究：〈落ちついている学校〉と〈荒れている学校〉では生徒文化にどのような違いがあるか 犯罪心理学研究, 43, 1-16.
- 加藤弘通・大久保智生 (2006). 問題行動をする生徒および学校生活に対する生徒の評価と学級の荒れとの関係：困難学級と通常学級の比較から 教育心理学研究, 54, 34-44.
- 河村茂雄 (1999). 楽しい学校生活を送るためのアンケートQU (中学生用) 図書文化
- 北村晴朗 (1965). 適応の心理学 誠信書房
- 小林朋子 (2009). 学校での教師へのコンサルテーションに関する研究の動向と課題 心理臨床学研究, 27, 491-500.
- 小泉令三 (2011). 社会性と情動の学習 (SEL-8S) の導入と実践 ミネルヴァ書房
- 小嶋佳子・松田文子 (1999). 中学生の暴力に対する欲求・規範意識, 課題・被害経験, および学校適応感 広島大学教育学部紀要, 48, 131-139.
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター (2011). 生徒指導資料第4集 学校と関係機関等との連携—学校を支える日々の連携— 東洋館出版社
- 近藤邦夫 (1994). 教師と子どもの関係づくり—学校の臨床心理学 東京大学出版会
- 近藤邦夫 (1995). 子どもと教育 子どもと教師のもつれ 教育相談から 岩波書店
- 久我直人・武田國宏 (2020). FEELBOTを活用した生徒指導 生徒指導学研究, 17-23.
- Kulka, R. A., Klinge, D. M. & Mann, D. W. (1980). School crime and disruption as a function of student-school fit: an empirical assessment. *Journal of Youth and Adolescence*, 9, 353-370.
- 栗原慎二・井上 弥 (2010). アセス (学級全体と児童生徒個人のアセスメントソフト) の使い方・活かし方 ほんの森出版
- 桑山久仁子 (2003). 外界への過剰適応に関する—考察：欲求不満場面における感情表現の仕方を手がかりにして 京都大学大学院教育学研究科紀要, 49, 481-493.
- Ladd, G. W., & Burgess, K. B. (2001). Do relational risks and protective factors moderate the linkages between childhood aggression and early psychological and school adjustment? *Child Development*, 72, 1579-1601.
- Lazarus, S., & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer, 本明 寛・春木 豊・織田正美 (監訳) (1991). ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究 実務教育出版
- Lerner, J. V. (1983). The role of temperament in psychological

- adaptation in early adolescents: A test of a “goodness of fit” model. *The Journal of Genetic Psychology*, *143*, 149-157.
- Lerner, J. V., Baker, N., & Lerner, R. M. (1985). A person-context goodness of fit model of adjustment. IN P.C. Kendall (Ed.), *Advance in cognitive-behavioral research and therapy* 4. New York: Academic Pres. pp. 111-136.
- 三島美砂 (2006). スクールカウンセラーによる学級集団づくりに悩む担任教師への支援－「教師用RCRT」・〈学級雰囲気〉質問紙を用いて－ 神戸常盤短期大学紀要, *28*, 17-25.
- 宮下一博・細川あゆみ (1993). 孤独感と性格・適応及び対処方略との関係 千葉大学教育学部研究紀要, *41*, 33-38
- 文部科学省 (2024). 令和5年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について
- Moreno, J. L. (1953). *Foundations of sociometry, group psychotherapy and socio-drama* (2nd ed.) Beacon, NY: Beacon House.
- 緒方明子 (2004). 教師へのコンサルテーションの技法 石隈利紀・玉瀬耕治・緒方明子・永松裕希 (編) 学校心理士による心理教育的援助サービス 北大路書房, 88-100.
- 岡田有司 (2012). 中学校への適応に対する生徒関係的側面・教育指導的側面からのアプローチ 教育心理学研究, *60*, 153-166.
- 奥野誠一・小林正幸 (2007). 中学生の心理的ストレスと相互独立性・相互協調性との関連 教育心理学研究, *55*, 550-559.
- 大久保智生 (2010). 青年の学校適応に関する研究 関係論的アプローチによる検討
- ナカニシヤ出版
- 大久保智生 (2011). 現代の子どもや若者は社会性が欠如しているのか 大久保智生・牧郁子 (編) 実践を振り返るための教育心理学 ナカニシヤ出版, 113-128.
- 大久保智生・加藤弘通 (2002). 問題行動と生徒文化についての研究 (5): 問題のある学級と問題のない学級の比較 日本犯罪心理学会第40回大会発表論文集, 158-159.
- 大久保智生・加藤弘通・尾崎沙織・江村早紀 (2021). 教師の学級経営が児童の学級適応に及ぼす影響－学級経営スタイル尺度の作成と適合の良さ仮説の検証－ 心理科学, *42*, 20-28.
- 佐々木佳穂・荊間澤勇人 (2009). スクールカウンセラーによる学級経営への支援－学級満足度尺度を活用したコンサルテーション カウンセリング研究, *42* (4), 322-331.
- 佐々木正宏 (1992). 適応の基礎 大貫敬一・佐々木正宏 (編) 心の健康と適応 福村出版 pp. 123-144.
- 佐藤 学・岩川直樹・秋田喜代美 (1991). 教師の実践的思考様式に関する研究 (1): 熟練教師と初任教師のモニタリングの比較を中心に 東京大学教育学部紀要, *30*, 177-198.
- Shim, S. S., Keifer, S. M., & Wangm C. (2013). Help-seeking among peers: The role of goal structure and peer climate. *Journal of educational Research*, *106*, 290-300.
- 鈴木洋介・庄司一子 (2024). 教師の省察が教師の児童認知次元と児童の学級適応に及ぼす影響—自己モニタリング面接による事例的検証— 学校心理学研究, *23*, 151-163.
- 高橋直樹・山本圭作 (2021). データ利活用による個別最適な支援～大阪市における

- スマートスクール次世代支援事業～国立  
情報学研究所教育機関DXシンポ  
[https://www.nii.ac.jp/event/upload/  
20211119-08\\_TakahashiYamamoto.  
pdf](https://www.nii.ac.jp/event/upload/20211119-08_TakahashiYamamoto.pdf) (2025年9月17日確認)
- Thomas, D. E, Bierman, K. L., & Powers, C.  
J. (2011). The influence of classroom  
aggression and classroom climate on  
aggressive-disruptive behavior. *Children  
Development, 82*, 751-757.
- Trickett, E.J., & Moos, R. H. (1995).  
Classroom environment scale manual:  
development, applications, research (3rd  
ed). Palo Alto, CA: Consulting  
psychologists press
- Vitaliano, P. P., DeWolfe, D. J., Maiuro, R. D.,  
Russo, J., & Katon, W. (1990).  
Appraised changeability of a stressor  
as a modifier of the relationship  
between coping and depression: A test  
of the hypothesis of fit. *Journal of  
Personality & Social Psychology, 59*,  
582-592.
- Wentzel, K. R. (2002). Are effective  
teachers like good parents? Teaching  
styles and student adjustment in early  
adolescence. *Child Development, 73*,  
287-301.
- Wentzel, K. R. (2003a). Sociometric status  
and adjustment in middle school: A  
longitudinal study. *The Journal of Early  
Adolescence, 23*, 5-28.
- Wentzel, K. R. (2003b). School adjustment.  
In W. M. Reynolds, G. J. Miller, & I. B.  
Weiner (Eds.), *Handbook of  
psychology, Vol.7. Educational  
psychology*. New Jersey: Jhon Wiley &  
Sons. pp. 235-258.
- 八木 晃・篠原彰一 (1989). 適応行動につ  
いて 末永俊郎・金城辰夫・平野俊二・  
篠原彰一 (編) 適応行動の基礎過程：学  
習心理学の諸問題 培風館, pp. 1-9.  
八並光俊 (2023). 情動把握アプリを用いた  
小学生の情動に関するケーススタディ  
東京理科大学教養教育研究院紀要, 1,  
148-163.

